

博覧会と水景

2005年日本国際博覧会 会場演出総合プロデューサー
桐蔭横浜大学 生命環境工学研究機構 機構長
教授 涌井 史郎



● 博覧会に水景は不可分

博覧会の歴史は1850年、ロンドンはハイパークで開催された世界初の万国博覧会以前に遡る。18世紀半ばから始まった産業革命のそれぞれの成果を、まずフランス、ついで英国が内国博覧会として開催していた。

その成果を基に、七つの海の支配を確立した英国が、自らの世界に対する影響力を誇示するために万国博覧会の開催がビクトリア女王の夫君アルバート殿下をプロデューサーとして企画されたのである。

その会場計画は難航した。ニレの大木を含めたハイパークの景致と博覧会の開催をいかに両立を図るかが問われたのである。結果、世論に推され、造園家ジョセフ・バクストンの設計による硝子と鉄による光に満ちた温室様の水晶宮と称されたバビリオンが採用された。

この長さ563m、幅が124m、77000㎡の巨大バビリオンの中心に3本のニレに並んで幾つかの噴水が設えられた。

その一つが高さ12mに近いガラスの噴水であり、光に満ち、ニレの大木の緑を背景にしたこの噴水は、英国の輝きを見せつけるうえで実に効果的であり、人々を驚嘆させた。

1867年の第2回パリ万博、1873年のウィーン万博、1876年のフィラデルフィア万博、1878年の第3回パリ万博、1889年エッフェル塔建設を伴う第4回パリ万博等々のいずれもが都市河川の水景を背景に会場建設がなされている。

しかも実に規模の大きい噴水・カスケード・人工湖等により会場が彩られていた。

その後の博覧会において、水景は会場の彩りとして、また展示物として欠くことのできぬものとなった。まさに歴史的に見ても博覧会と水景は、不可分の関係にあったのである。

● 何故、人は水景を

世界共通の神話がある。世界の中心にそびえ立つ人が立ち入ることが出来ぬ峻岳があり、それを囲み巨大な湖があり、そこから東西南北世界の四方に川が流れ下るといふ世界観である。

この構図はイスラム世界の庭園、そして中世の教会庭園にも見ることができる。

つまり水は神の恵みそのものであり、その水を噴水・噴泉・カスケード・滝と人工的に制御する技術と富を手に入れることは、その当事者が神に近づいた証しとなるのである。

蒸気ポンプ、配管、そして思い描く水景を生み出す水利学的計算力は、産業技術の水準の高さの証しそのものであ

り、科学技術に未来を託し、その予兆を提示してきた先催博覧会に、水景はただの会場演出の手法の一つとしてではなく、博覧会の目的の一つとして時代の最先端の技術水準を明示するうえにならぬものであった。

● 愛・地球博の水景

2005年3月から愛知県名古屋近郊の瀬戸市ならびに長久手町の2会場で、9月まで開催される35年ぶりの万博にも、数々の水景が設えられている。

ミレニアム21世紀初めての万国博覧会である、愛・地球博は、これまでの世界で開かれた博覧会とは全く趣きを異にする。

第1回のロンドン万博以来20世紀の半ばまで万博は国家が、それから直近のハノーバー万博までは国家と企業が博覧会の主人公であった。



技術開発による人類の未来と成果を国々と企業が指し示す博覧会の歴史からは当然のことであろう。

愛・地球博はそのテーマを「自然の叡知」とし、地球上の環境問題を主題としている。環境問題の解決には、当然に国家や企業があたりねばならないが、それ以上に一人一人の市民の意識が問われる。

そこで愛・地球博の事業推進にあたっては国家・企業について三つ目のエンジン、市民参画が加えられた。

これまでの先催博と違い、会場内の企業バビリオンの数が極めて少なく、逆に市民参加のプログラムが極めて多いことに気づくであろう。また各国のバビリオンもこれまでの博覧会と異なり、六つの地域別に区分された「コモン」と称される各々のサイトに用意された同じ形のモジュールを共有する。

コモンとは言うまでもなく共有地である。つまり各国は、この博覧会に参加する一方で、共有するコモンの環境につい